

ふ く い

## 校 訓

真実(まこと)をもとめ 身をきたえ ともにつとむる福井校  
 かしこく やさしく たくましく  
 ふるさと大好き福井っ子

## 新年を迎えて

平成 30 年 11 月 23 日 (金・祝) 午前 10 時 30 分。福知山市三段池公園に号砲が鳴り、第 28 回福知山マラソンの開始を告げる。家族、職場の仲間、友人をはじめ自分を取り巻く様々な方に思いを馳せる。今年も無事にこの日を迎えられたことに感謝し、皆さんのお陰でこの場に立てたことに感謝し、そして、元気に走れることに感謝し、一歩目を踏み出す。42.195 km の長い旅が始まる。全国各地から集まった約 1 万人の仲間と共に。

三段池公園は小高い丘にあるため、しばらくは下り道で足取りも軽い。アドレナリンも適度に出ている。しかし、加齢と練習不足を考え、無理のないペースを心掛ける。「42.195 km を楽しく走り、笑顔で余裕を持ってゴールする。」これがここ最近のテーマである。5 km、10 km、20 km……。このマラソン最大の楽しみである 24 km 地点を迎える。この地点には大江町二箇自治会によるお汁粉ステーションがあり、毎年立ち寄る(走り寄り)。駆け出しの教師だった頃にお世話になった先輩先生と事務職員さんがボランティアとして働いている。「今年も元気にやって来ました!」「やー、先生! 元気? はい! お汁粉飲んで頑張る!」万感の思いを込めてほんの数秒の短い会話を交わし、再会を喜び合う。30 km を過ぎたあたりからは残りの距離を数え出す。「あと 10 km」「あと 5 km」「あと 3 km」……。身体が重い、関節が軋む、足が上がらない、苦しい、辛い。沿道のガラス戸やカーブミラーに、身も心も疲れ切った自分が映っている。「あと 1 km」往路と逆の上り坂をただひたすら前を向いて進んでいく。「一步一步、これしかない。」自分に言い聞かせる。

自己ベストタイムから遅れること約 1 時間、待望のフィニッシュゲートにたどり着く。実行委員会をはじめ関係団体や関係者の方々、給水・給食に携わってくださった方々、沿道で応援してくださった方々、皆さんに感謝の気持ちを込めて、回れ右して心を込めて深く頭を下げる。「安心して走らせていただきました。楽しませていただきました。ありがとうございました。」と心の中でつぶやきながら……。前に進むと大会のスタッフジャンパーを着たボランティアの若者たちが数十人、フィニッシュロードを作ってくれている。「お帰り!」「ナイスラン!」「お疲れ様!」「頑張りましたね!」様々な労いの言葉をかけてくれる中を、ハイタッチして進む。嬉し涙か、安堵の涙か、感動の涙か、ヨレヨレでボロボロの自分への情けない涙か、この日までの努力を怠った悔し涙か、熱いものが幾筋も頬を伝う。38 回目のマラソンが終わった。満足した結果を得るには小さな努力を積み重ねるしかない。マラソンは人生と同じ、難しい。

明けましておめでとうございます。

保護者の皆様、地域の皆様には、つつがなく希望に満ちた新年をお迎えのこととお喜び申しあげます。今年も昨年同様に本校教育推進へのご理解とお力添えを賜りますよう、よろしく願いいたします。

さて、毎年ノーベル文学賞の候補に挙がる村上春樹氏は市民ランナーであり、ひたすら走り続ける小説家ランナーであることは有名な話です。村上氏は、著書『走ることについて語るときにぼくの語ること』の中で次のように述べています。「僕はもちろんたいしたランナーではない。走り手としてはきわめて平凡な——むしろ凡庸というべきだろう——レベルだ。しかしそれはまったく重要な問題ではない。昨日の自分をわずかでも乗り越えていくこと、それが重要なのだ。」

願いや目標を持ち、なりたい自分を目指して強い意志を持ち、根気強く努力することができるよう、子どもたちを励まし、支援していく 1 年にしたいと思います。

去年より今年、昨日より今日。目標を持って少しずつ前に進み、過去の自分を乗り越える 1 年、1 日を過ごさせたいと思います。

これからますます寒さが厳しくなることが予想されます。保護者・地域の皆様、どうかご自愛ください。

校長 中西 一就

教職員一同

